

『続の原』 輪講 発句

二〇一五年（平成二七）四月一八日の例会にて発表

担当 日本女子大大学院・時田紗緒里

○春31番の発句

連翹れんげうの匂ひを菴の風見哉

峽水

〈作者について〉

作者の峽水は、詳細不明。続の原に三句、以下、錦どる（百韻）五句、田螺とられて（世吉）七句、月となく夜（歌仙）五句、日の春を（百韻）三句、武蔵曲 五句、虚栗 一句、蛙合 一句、続虚栗 三句、其袋 一句、いつを昔 一句、梨園 一句、丙寅之歳旦 二句、俳諧瓜作 二句、蘆分船 十七句、はり袋 四句、根なし蔓 十八句入集。

〈語注〉

・「連翹」によって春。連翹は、葉に先立ち、葉腋に対生して黄色の筒状花をつける。漢名の連翹の「翹」は枝がすくすくと伸びて花をつけている形を、鳥の長い尾にたとえたものといわれている。枝が地に届くと、そこから根を出す。半蔓性の長い枝先まで、むせるような鮮やかな黄色い花をびっしりつけている様子は、春の象徴のような勢いがある。春が盛りを過ぎる頃から小さな葉が萌え出す。（『角川俳句大歳時記』春）

連翹や井手の大臣の後の花 春澄『洛陽集』

題しらず よみ人しらず

かはづなくるでの山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

この歌は、ある人のいはく、たちばなのきよともが歌なり（『古今集』・春下・一二五）

連翹や柳が枝に山吹を 湖春『洛陽集』

連翹はめでたし手間のいらぬ花 荷兮『曠野後集』

和歌で『連翹』の語を使用したものはない。

・風見 かざみ、風の方向、強さなどを見ること。また風圧によって回転するように装置されたもので、その回転のさまを見て風の方向を知る道具。屋根や船中に設ける。

四月三日 柳を植てから風見はいらぬ也 雑俳『柳籠裏』

〈句解〉

「連翹の花の風情を、我が庵の風見にすることだ。」

風見は、風を視覚的に捉えるものである。当該句は、連翹を風見に見立て、春の風を捉えている。

○春32番の発句

山吹あきや焔の露こそいやしけれ

文鱗

〈作者について〉

作者の文鱗は、生没年未詳。鳥居氏。別号、虚無斎。『真山家』では其角らが文鱗の旅亭を訪れ、ともに遊んでいる。『丙寅初懷紙』『続虚栗』『花摘』などに入集。（『俳文学大辞典』）

続の原に二句、以下、初懷紙評注 四句、日の春を 八句、冬景や 一句、蛙合 一句、旅人と 二句、芭蕉書簡・寂照宛（貞享四年正月二十日付） 一句、続虚栗 十九句、続きの原句合 一句、阿羅野 五句、花摘 一句、いつを昔 一句、俳諧勸進牒 九句、花時鳥 一句、弑樓賦 五句十連句八句、貞享三年歳旦集 一句、新山家 十三句、ひとつ松 一句、伊賀餞別 一句、貞享五年歳旦集 三句、戌たつ歳旦 一句、四季千句 十三句、秋津島 一句、西の雲 一句、一字幽蘭集 一句、桃の実 一句、好春自筆句集 一句入集。

〈語注〉

・「山吹」によつて春。ヤマブキはフジとともに晩春から初夏にかけて和歌の世界を彩る代表的な景物であり、万葉集以来多くよまれている。鮮黄色の花片は風に散りやすく、「ほろほろと山吹散るか滝の音」（吉野紀行）という芭蕉の句はよく知られているが、万葉集にもすでに「君が手触れず花散らめやも」と花の散る様子がうたわれている。（『和歌植物表現辞典』一九九四年六月）

暮春款冬

吹く風のために見ぬかたに行く春を消してもをしめ山吹の露（章根集・一九一一）

建長八年百首歌合 前大納言頭朝卿

我が屋どに引きうゑて見んしげ山の露に匂へる山ぶぎの花（夫木集・春六・二〇三八）

さけばかつはなだにおもき山吹の枝にかかれる春雨の露（夫木集・二〇七六）

山吹の露菜の花のかこち顔なるや 桃青『東日記』

・ 焔の露（＝秋の露）

題しらず よみ人しらず

あきのつゆいろいろいごとにおけばこそ山のこののはちくさなるらめ（古今集・五・秋

下・二五九）

銀杏も秋の露にやこがね色 勝興『続山井』

あえて「秋の露」と限定して、「春の露」との対比を強調している。

〈句解〉

「山吹の春の露と共にある風情の優れているのを見ると、秋の露と共にある様子こそが劣っていると思われることだなあ。」

当該句は、春の露と共にある山吹の風情を詠む。秋の露と共にある山吹の風情とを比較、春の山吹をより優れたものとする。秋の露により紅葉する黄とを対比する。

○春33番の発句

菜の華の黄みすさめよ 歸鴈

宇齋

〈作者について〉

作者の宇齋は、詳細不明。『続の原』一句（当該句のみ）以下、続虚栗 一句、戌たつ歳旦 一句、四季千句 四句、いつを昔 二句、萩の露 一句入集。

〈語注〉

・「菜の花」によって、春。アブラナの花。葉の形が異なるコマツナ、ハクサイなども花がよく似ているため一般には区別されずに呼ばれることがある。『はなひ草』・『毛吹草』などでは二月。『御傘』には「菜つみは春也。菜の花も春也」とある。

菜の花や一本さきし松のもと 宗因『丸一年』

山吹きの露菜の花の色かこち顔なるや 芭蕉『東日記』

・黄ばみ 黄色みをおびること。

きはみぬる榊は金の御幣哉 頼広『ゆめみ草』

何所となう黄ばみをふくむ霞哉 玄梅『枕屏風』

・すさめよ：遊めよ 心のおもむくままにことをすすめる。もてあそぶ。慰みにする。心にとめて愛する。

おほあらしのもりのした草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし(古今集・雑上・八九二)

たび人のはたごのむまのゆきずりになつこの草をすさめやはせぬ(夫木・一二九七〇)

二月の蓬萊人もすさ(遊)めずや コ斎『日の春を』

燕にすさめられてや庭の桃 其角

・歸鴈 秋に日本に渡ってきた真雁や菱食などの雁が、三月から四月頃にかけて北方の繁殖地に帰ってゆくことをいう。冬をともに過した十数羽から数十羽の群れが列を組んで、鉤のようになつたり棹のようになつたりして飛んでゆく。(『角川俳句大歳時記』・春)

〈句解〉

「菜の花畑の一面の黄色に心を寄せて留まりなさい、帰ってしまおうとする鴈よ。」

鴈は、三月から四月にかけて渡り、菜の花が四月に満開になる。菜の花の黄色は春の象徴である。鴈が菜の花を楽しむことなく帰ることを前提とし、菜の花の黄色で足を止めることを期待する。鴈が帰ることを惜しんで引き留める意で詠まれている。

○春34番の発句

壙かきの桃結ゆはれなからの盛哉

蚤山

〈作者について〉

作者の蚤山は、詳細不明。続の原に四句、他「枯蓮に百韻」三十八句入集。

〈語注〉

・「桃」によって、春。桃は晩春、ふくよかな淡紅の花を咲かせる。バラ科サクラ属のモモ

巫属に属する落葉樹。中国黄河上流域の原産だが、弥生時代に日本に渡来した。花は五弁の一重、桜より紅が濃く、一回り大きい。果樹として栽培することが多いが、観賞用の花桃には八重、白、緋、紅白咲き分けの源平もある。(略)桃は雛祭の花でもある。桃の花も雛祭も旧暦三月(新暦四月)、晩春の季語だったが、明治の改暦以降、雛祭を仲春の新暦三月三日に行う地方が増え、桃の花と雛祭の時期がずれてしまった。今ではただ桃といえは桃の実のことだが、江戸時代以前の句では桃の花をさすことがしばしばある。(『角川俳句大歳時記』・春)

・壙の桃 壙は垣根、壁を指す。当該句では、堤のことか

桃の木かよくさきさくよかきのもも 『崑山集』

ももの花境しまらぬかきね哉 『猿蓑』

藪垣や馬の貌かくももの花 孤屋『炭俵』

家の垣根としては、平安時代庶民の家では桃の花が植えられることが多かった。貴族の邸宅でも植えられていたが桜に押しあされあまりとりあげられることがなかったようである。当該句「かきのもも」は、垣根としてもしくは垣根のように植えられた桃の木を詠むか。

〈句解〉

「土手の桃の堤は、結び付けられながらも盛りを迎えていることだ。」
土手に植えられた、桃の木が堤防として結び付けられながら春に盛りを迎えた様子。自然のままではなく、結び付けられて枝ぶりを制限されながらも咲き誇る桃の花の生命力を感じている。

○春35番の発句

雛のさま宮腹くくにましくける 其角

〈作者について〉

作者の其角は既出。春10番を参照のこと。『続の原』に五句入集。

〈語注〉

・雛によって、春。雛は、紙や木などでこしらえ、着物を着せたりする小型の人形で、女兒の玩具。また、雛祭に飾る人形。ひな。雛人形。

草の戸も住替る代ぞ雛の家 芭蕉『おくのほそ道』

振舞や下座になをる去年の雛 去来『猿蓑』

上座ほど雛のすがたの新なり 其角『俳諧勸進牒』(・春・一七八)

・宮腹 みやばら。皇女の子として生まれること。また、その生まれた人。『源氏物語』帚木に「宮ばらの中将は、なかに親しく馴れきこえ給て」とあり、『平家物語』富士川に「薩摩守忠度は、年来ある宮腹の女房のもとへかよはれけるが」とある。

【参考】

はらばら【腹々】 同一の夫の子をそれぞれ産んだ妻妾たち。それぞれの腹。『源氏物語』桐壺に「御子どもあまた、はらはらにもものし給」、『保元物語』為義最後の事に「腹々に男女の子ども四十二人ぞありける」とある。

〈句解〉

「雛人形が家々で飾られているさまは、あちらにもこちらにも天皇の御子が母違いで何人もいらっしやるようである。」

一対の内裏雛が、あちこちの家で飾られているひな祭りの情景を詠む。「宮腹く」は、「宮が腹々に」と解釈した。どの家庭もひな人形が飾られ、皇族がたくさんいるようだと滑稽さを詠んだ。

新旧複数のひな人形が飾られ、新しいものほど小さくなる様子から大が親、小が子として年々皇族が生まれているようだとする解釈、「宮腹宮腹」とし、皇女の子として生まれた子が複数いるとすする解釈、皇女の子のような高貴な雛人形の様子を詠んだとすする解釈もある。